

# 猫坂海火

Illustration: がおう

か  
K A M I  
K O I !  
み  
こ  
い  
い  
!

くっいたら  
とれません

恐れられ  
崇められ

知ることによって希望が生まれる。  
知ることによって絶望が生まれる。  
だからだろうか、私が知ろうとしなかったのは。  
思うに私は生まれた時からその事に気づいていたのだろう。けれど私という存在はその事実  
に相反していた……………だから無意識の内に知ろうとしなかった。  
知ってしまえば、そこに生まれるのは希望ではないと気づいていたから。  
だから私はそれを知ろうとしないままにただ日々を生きていた。

知らないというのとはある意味で幸せな事だろう。上がある事を知らなければ現状で満足する  
事が出来る……………それ以上を望むことはない。

プロローグ

ある日の記憶

……………KAMIKOI!



カバー・口絵 本文イラスト  
がおう

そして恐れられ、生きる為に殺し合った。

その間に少しずつ、そう少しずつ摩擦していくのが自分でわかった。

きつとそう、これが続いていけばいつか自分は消えてなくなるのだらうと知った。

それも悪くないと私は思っていた。

悪くないと私は思おうとしていた。

けれど私が完全に摩擦してしまふその前に、私の心は折れたのだ。

そう、あの日。

私の前に現れた少年が、私の心を折った。

それはもう完全に、どうしようもないくらいに折ったのだ。

# 一章

## 再会は空の上

.....KAMIKOI!



そこは朝の喧騒賑わう高校の教室。HRが始まるまでの僅かな時間を利用して生徒たちは御思い思いに友人達との会話を楽しんでいる。そんな教室の中で一人のんびりと物思いにふけるように窓の外を見やる生徒が一人。見たところ取り立てて特徴の無い少年だ。平均的な身長と体重に平凡な容姿。髪も校則に乗っ取ってやや短めに切り揃えているだけでこだわりは全くセツトもしていない.....強いて言うなら姿勢が良いことくらいだろうか。座る姿勢は乱れが無く見るだけで整っていることがよくわかる。

彼、神来旭は神社の跡取り息子だ。天候を司ると言われる蒼媛之大神を祀るその神社は古くから地域に親しまれて参拝客も多い。旭自身は神様の存在を信じているわけではないが将来的に家を継ぐ事には不満はなかった。それもあるが基本的な品行方正を心がけてきたし父親の言い付けもしっかりと守った.....ただ、その中の一つだけ首を傾げるような言い付けといつか忠告があったが。

「もしお前が誰かを好きになり付き合いたいと思うなら.....命を懸ける覚悟をしろ」  
初めは冗談かと思ったが父親は冗談をあまり言わない。それに目がマジだった。冗談ではな

いのなら理由を知りたいところだが頑なに父親は理由を教えようとはしなかった。ただ定期的にその忠告を繰り返しただけだ。

こうなるとさすがに旭も恋愛に對して及び腰になる。例え神を信じていなくても神職にある人間からそんな言葉を繰り返されれば不気味にも思う。少なくとも軽い気持ちで誰かと付き合ってみようとは思えなくなった。

「おはよう、神来君」

声を掛けられて視線を向ける。つまるところ軽い気持ちでなければ後は覚悟の問題という話である……………そしてその覚悟たる相手に旭は高校に入つて出会つた。

「ああ、おはよう御備さん」

朝の挨拶を返しながら自然と笑みが浮かぶ。彼女は御備風歌。旭が高校に入つてから知り合つたクラスメイトだ。将来はパティシエを目指しているらしく、普段から髪は短めにまとめていて清潔感に溢れている。当然お菓子作りには毎日余念がないようで、そのせいか彼女が近くに来るとふんわりと甘い匂いが漂ってくる。

「なにかいいことあつたの?」

「え」

「だつて神来君なんか嬉しそうだよ」

彼女自身も笑みを浮かべてこちらを覗き込んでくる。

「あーつと、そうかな?」

内心で平定を保ちながら表情を取り繕う。まさか好意を抱いている相手に朝から話しかけられたから機嫌がいいのだと、そんな正直に答えられるはずもない。

「そういう御備さんのほうも機嫌良さそうだけど」

自身への注目を逸らす為に対象を本人へと移行させる。

「私はね、これ!」

風歌は嬉しそうに手に持っていた小さな紙袋を自身の胸の前に掲げて見せる。その袋からは焼き菓子のような甘い匂いが漂ってきた。

「このお菓子は昨日の夜に焼いたんだけどね、すつこく上手にできたの」

「へえ」

確かに良い匂いだ。焦げた風味もなくちょうどいい焼き加減。

「何か聞いても?」

「えへへ、それはお昼のお楽しみ」

はにかんで風歌は紙袋を引っ込める。けれどそれはつまり昼になればご相伴にあずかれるという事だ。実際のところ今までにも旭は風歌から何度も菓子を御馳走されている。そのどれもが店売りのような出来栄までお世辞を言う必要がないくらいに美味しかった。

「楽しみにしてるよ」

「うん！」

笑顔で風歌は頷く。

「……………あー、お二人さん」

と、そこにやや野太い声が割り込む。見やればそこに級友の一人が立っていた。彼は館林修介。クラスの中でも旭と仲のいい男子生徒だ。柔道部に所属しているせいか体格がよく、見るからに力がありそうだと思われる。けれどその見た目に反して人の機微に聡く気遣いの出来る男でもある。

「仲がいいのは結構だがそろそろHR始まるぞ」

言われて時計を見ると確かに担任が来るまでもう時間はほとんどない。

「あ、ほんとだ私席に戻るね！」

「ああまた」

「うん！」

頷いて風歌は自分の席に戻っていく。

「なあ、旭」

その後ろ姿を見送る旭に修介が声をかける。

「なに？」

「いい加減お前らは付き合ってるのか？」

どこか呆れるような表情の修介……………いい加減、という言葉にその表情の全てが込められていた気がした。

「付き合ってる……………ないけど」

その意味がよくわかっているのか旭は力ない声で答える。

「クラスの人間は二人をよく知ってるから今さら間に入ろうとする奴はいないがな……………」  
それを知らん奴らは別だ。御備が男子に結構人気あるってことはお前も理解してるだろう？」

「……………」

風歌は容姿も美人の部類に入るし性格も悪くない。社交性もあるので交友範囲も広く彼女を知る人間は多い……………つまるところ彼女に惹かれる人間も。

「お前らの日常見ると今さらって気はするがな……………肩書きっていうのは重要だぜ？  
魔除けにはなるからな」

それだけで諦められるほど恋愛は簡単なものではない。しかしそれでも無謀な試みに挑戦する人間は大きく目減りするだろう。それは旭にとっても好ましいことではあるはずだ。

「とういかなんでお前が未だに御備に告白してないのか俺にはわからない」

さっきのやり取りを見るだけでもクラスの人間としては胸焼けもいところだ。そんな状態がすでに結構な期間続いていて皆もう辟易しているくらいなのだ。

「なんて言うか、その……………踏ん切りがつかないというか」

父親からの謎の忠告に關しては覚悟を決めているつもりだ。だがそれなのに気持ちを伝えようという段になるとなぜか躊躇ためらいが生まれてしまう……………その理由は旭にもわからずただもやもやするだけなのだ。

「つける」

そんな旭に対する友人の返答は端的だった……………だがそれが出来るならとつくの昔にそうしている。傍から見て自分がどう見えているかくらい旭にも客観視できる。男のけじめもつけられない臆病おくびょうなやつ……………そんな状況が好ましいとは旭だって思っていない。

「……………はあ」

ため息を吐つく。

それでも、何が引っかかって踏ん切りがつかないのか旭にはわからないのだ。



「お昼からずっと考え事してるみたいだね」

「え」

気が付けば放課後の帰り道、不意に風歌から掛けられた言葉に旭はきよんとした表情を浮

かべた。見ればそこには風歌の姿……………一緒に帰っているのだから当たり前だ。

旭は家の手伝いもあるから部活はやつていないが風歌は家庭科部に所属している。だから普段は帰る時間が一致することは多くない。けれど風歌の部活が休みの日などはいつも一緒に帰っている……………今日もその日だ。それは貴重な時間であり旭としても大事にしたい一時のはずだった。

「えーっと、そんなことないつもりだけど」

けれど自分のことながら答える言葉は少し白々しい。

「嘘吐うそつき」

少し頬を膨らませて風歌が旭を見る。

「それじゃあお昼に私が作ったお菓子は美味しかった？」

「……………もちろん、美味しかったよ」

美味しかった、うん、美味しかったはずだ。

「じゃあ、何を食べたか覚えてるよね？」

当然の事を風歌は尋ねる。

「それは、うん……………甘い、焼き菓子だった」

「チーズタルト」

はつきりしない旭の返答にはつきりと風歌は答えを返す。その表情はどこか拗すねているよう

にも見えた。

「自信作だったんだよ？」

「……………ごめん」

そのようなものを食べた記憶はあるがはっきりとはしない。旭にどんな事情があってもそれは心を込めて作ってくれた相手に対して失礼であることは違いなかった。

「じゃあ、なにをずっと考え込んでたのか教えてくれるよね？」

「……………」

原因は言うまでもなく朝の修介との会話の内容だ。それは確かに突きつけられるのも今さらという話ではあったが、旭が半ば意識的に忘我していた事実でもあった。だからこそ反省し改めてその事実に向き合おうと考え込んでいたのだが……………それを当の風歌に話せば苦労はしない。というか話したら実質その悩みは解決するも同義だ。

「その、さ」

それでも何かを言葉にはしなければならぬと旭は口を開く。

「これからの事を、考えてたんだ」

「これからのこと？」

「うん」

聞き返す風歌に旭は頷く。正直今の状態に自分は不満があるわけではない。確かに男として

のけじめはついていない状態ではあるが……………それさえ除けば幸せな毎日であることは間違いない。けれどこのままではきつとその今は永遠には続かない。そしてその終わりはきつと二人にとって好ましくない結果になってしまうはずだ。

「その、僕と……………風歌の二人のこれからを、さ」

思えば名前で呼ぶのもこれが初めてだったかもしれない。

「!?」

不意打ちを受けたように風歌は驚き、顔を赤くした。

「えっと、私と……………旭君の、これから？」

そして彼女も旭を名前で呼んだ。その表情はこの先に旭が口にするであろう言葉を期待しているのは疑いようもない……………そしてその期待を裏切れば落胆は大きいはずだ。そうならばきつと旭が望んだものとは違う形で今は変わってしまうに違いない。

だから、今さら踏ん切りがつかないなんて言い訳はもうできない……………例えこの土壇場にまだ引つかかるものが旭にあったとしても、だ。

「風歌……………僕は」

あと数秒早く口にすることが出来ていたら運命は変わったのだろうか。だが考えたところで一度進んだ時間が戻ることはありえない。

「え、旭君……………?」

きよとんとした表情を風歌は浮かべた。

目の前に居たはずの旭のその姿が………不意に消えたのだ。



「えっ？」

気が付けば空の上から地上を見下ろしていた。理解不能の状況とその光景から来る原始的な恐怖。その二つの感情が織り交ざって困惑し………ほんの少し前まで抱いていたはずの覚悟と感情の事など旭の頭から消えてしまった。

「わ、わわわわわわわっ!？」

思わず慌てふためいてじたばたと体を動かす。そんなことをしても何の意味もありはしなないが理性的な考えはどこかに行ってしまう………自分がなぜ浮いているのかその原因に意識はまだ向かえないのだ。

「こら暴れると危ないぞ、危ないんだぞ?」

声と共に胸を抑え付けられるようなギョッとした感触に、背中には押し付けられたような柔らかな感触………それでようやく旭は自分が誰かに抱えられて空の上に居るのだという事実

を認識した。

「だ、誰………?」

どうやって浮いているのかよりもまずそれが浮かんだ。

「うん? 蒼媛は蒼媛だぞ?」

何を当然の事をというような返答。だが旭にはそんな名前に聞き覚えが………ないこともない。そんな名前の知り合いは存在しないがその名前は知っている。

奇遇にも、そう奇遇にも旭の実家である神社で祀っている神様の名前が蒼媛だ。けれどそれはそんな馬鹿なという類の一致であって、それを事実だと推察するにはいささか荒唐無稽過ぎる………そう、ここが空の上でなかったなら。

今、旭の置かれている状況は混乱したその頭にまさかと思わせるには充分過ぎた。

「えっと、それは当家で祀られている蒼媛乃大神さまでよろしいのでしょうか?」

恐る恐る旭は尋ねる。

「だから蒼媛はそう言ってるぞ?」

返ってきたのは肯定。しかしそれで全て納得できるわけでもない。それが信じられるかどうかの問題以前に聞くべき事が他にあるからだ。

「ではその、蒼媛様はなんで俺を抱えて飛んでらっしゃるのですか?」

「我慢できなかったからだ!」







旭は気づかなかったが蒼媛は浮いているのだけではなく緩やかに飛んでいたらしい。それに旭が気づいたのは目的地に着いてゆつくりと下降し始めてからだった。その頃には蒼媛も彼への可愛がりを一旦治めていたので落ち着いて風景を見回す余裕もできていた。

「ここは……………」

そこは見覚えのある風景だった。彼の実家である神社。その裏手にある小高い山。祀神である蒼媛乃大神の神域として神主である彼の父親以外は立ち入りを禁止されている場所だ。その山の中腹にある森の開けた場所、少し平地になって大きな平たい岩が鎮座しているのが見えるところへと蒼媛は降りようとしていた。

「……………」

半ばもう信じてはいたが、いよいよ蒼媛がその発言通り蒼媛乃大神である可能性が高くなったことを旭は実感していた……………もつとも仮に事実だとしても旭が選ばれた理由に関しては依然不明のままだが。いやまあ、蒼媛の態度を見ればそれも予想はつくが今度はその理由がわからないという堂々巡りだ。

「着いたのだぞ」

「……………えと、はい」

考えている間に岩の上へと着地する。何はともあれまずは地面の上に下りられたことを喜ぶべきだろう。空の上と違って地上に居るなら行動の選択肢は大きく広がる……………逃げる、と

いう選択肢だつて選ぶことが出来るのだ。

「ええと、蒼媛……………様？」

とは言え、だ。

「なんだ堅苦しい……………蒼媛の事は蒼媛で構わぬ、構わぬのだぞ？」

「その、蒼媛様にそんなこと言われても……………」

正直本物の祀神かもしれない相手をいきなり呼び捨てにしろと言われても困る。旭は神の实在を信じてはいなかったが、信仰の象徴としての存在に敬意を持っていなかったわけではないから。

「むう、様はいらぬと言っておる」

露骨に不満そうな声が聞こえた。

「でも」

「いらぬ、いらぬのだぞ？」

「じゃあ、その……………蒼媛」

止むを得ず、というように旭がそう呼ぶ。

「うむ！」

途端に嬉しそうな声が返ってきた。

「それじゃあ、ええと蒼媛」

「なんだ？」

「どうして僕はまだ抱きかかえられているのでしょうか」

地面に下ろされても旭は解放されてはいなかった。未だにがっしりと後ろから抱えられたままである。空の上ではなくなったことで気持ちには余裕は生まれたが、むしろそのせいで背中を押し付けられた柔らかい感触を意識してしまい顔が熱くなってくる。

「愛おしいからに決まっっているだろう？」

当然の事だろうと言うような返答。

「あの、でも離して頂きたいなあ」と

「何故なのだ？」

悲しそうな声。それはまるで親に見捨てられた子供のもののように……これはただ離して欲しいと言っても聞いてくれないように思えた。かといってこのままでは体のとある部位が反応してしまいそうだから、と正直に言えるわけもない。しかしだからと嘘をついてごまかすには相手が悪い……何せ蒼媛は旭の一族が祀っている相手その本人だ。

「その、この体勢だと蒼媛の顔が見れないから……ほら、まだ正面から一度も向き合えてないわけだし」

嘘ではない。後ろから抱えられているは見ようもないし、蒼媛が顔を前に出した時には全力で頬に擦りついてきたのでまるで確認できなかった……地上に落ち着いたことだしさすが

に顔を確認しておきたいと思うのはおかしくないはずだ。

「そうか、そうだな！」

納得してくれたのかすぐにその手が離れる。幸い、ならばこうすればいいだろうと前向きに抱き直されるようなこともなかった。

「……………ふう」

ほっと息を吐いて蒼媛から一歩前に踏み出し、振り返り

「あ」

思わず声が出る。そこに居たのは旭と同じ年代くらいに見える少女……けれどその容姿はまるで違う。

まず最初に目を引いたのはその頭に生えた二本の角だ。物語に出てくるような龍を想起させる角。それが左右に一本ずつ生えて彼女が普通の人間ではないことを示してくる……けれどそれは彼女の姿を表すにあたっては些細な問題でしかない。

無造作に伸びたように見える長い濃い黒髪はまるで深い空のような色合いで柔らかくしなだれて見える。さらにその長い前髪の隙間から覗く瞳は琥珀のような色合いで輝き、旭をまっすぐに見据えていた。

纏っているのはその体軀には少し大きく見える羽織のような和服。文字通り纏っているだけのそれは辛うじて彼女の肌を隠してはいるものの今にもはだけそうだ……特にその細い体

には不釣り合いなほどにふくよかな胸の辺りが。大きくはだけたその胸元からは染み一つないきれいな肌の谷間が見え隠れしていて自然と目が惹きつけられる。そうするとほんの少し前まであの膨らみが自身の背中に押し付けられていたことを自覚してしまい、その感触を思い出してまた顔が熱くなってくる。

「っ……………!?!」

いかんいかと旭は頭を振る。今はそんな邪な考えを抱いている状況ではない。

「ふむ」

そんな旭の様子をよそに蒼媛は何か納得したように頷く。

「確かに再会はずからこんな風に向き合うべきだったかもしれぬな」

「え」

再会、という言葉に旭は疑問を抱く。

「では改めて旭……………久しぶりだな、久しぶりなのだぞ?」

けれどその疑問を深く考えるよりも先に蒼媛は微笑んで旭を見た。

「……………」

そんな彼女に旭は見入ってしまった……………久しぶりも何も旭には蒼媛と出会った記憶はどこにもない。だけどそんな疑問を口にするにすらできず、ただひたすらに旭は蒼媛のその笑顔に見入っていた。胸の奥、口にできない何かがあふれだしそうになる。



けれどその何かは溢れだす扉への繋がりを持たなくて……ただどうにもできないもどかさだけが胸いっぱいに広がる、そんな感覚。

その事を泣きたいのか、その何かで喜びたいのか

それすらも分からず旭の表情が歪みそうになる。

「ん、どうしたのだ？」

そんな旭を不思議に思ったのか蒼媛が首を傾げる。

「え、と……なんでもない」

はっと我に返る。それと同時に胸の奥にあったもどかさもどこかへと消えた。

「そうか」

特に気にした様子もなく蒼媛は納得する。

「……………」

そんな蒼媛に旭は気分を落ち着かせ、さてどうしようと考え。とりあえず抱きつきからは解放されたがそれで解決したわけでもない。未だ旭は状況を掴めておらず、さっきまでの蒼媛の様子からすればまた抱きつかれる可能性は低くはない……ならば今の内に逃げるかと言っても空を飛べる相手には難しかった。それに仮に逃げられたところでそれで解決するかと

言ったら否だ。むしろ泥沼になる未来が見える。

「その、蒼媛？」

だから状況を良い方向にするためにまず旭は知るところから始めるべきだ。

「なんだ？」

「聞きたいことがあるんだ」

「うむ」

「その、なんで僕に会いに来たのかなって」

「愛おしいからだぞ、なのだぞ？」

「……………いや、そうじゃなくて」

旭が知りたいのは理由じゃなくて目的だ。

「僕と会ってどうするつもりだったのかを聞きたいんだ」

「ふむ」

それに蒼媛は頷き、

「結婚とやらをするつもりだぞ、なのだぞ？」

そんなことを言った。

「……………は？」

思わず呆けた声が出る。まさか神である蒼媛から人間である自分へそんな言葉が出てくると

は全く予想していなかった。

「それをすれば夫婦とやらになれるのだろう?」

「そ、それはそうだけど!」

だからと言ってそれは困る。

「夫婦になればずっと旭と共に居られるようになると聞いたぞ、聞いたのだぞ?」

それがとても嬉しい事のように蒼媛は言う……………だが旭にしてみればそれは冷や汗をかきような発言だ。彼女から好意を抱かれていることはさすがにもう自覚しているが、結婚とか夫婦という言葉はさすがに旭にとつて重すぎる。

「いや、あの、その……………蒼媛」

別に蒼媛に対して忌避があるわけではない。いきなり空に連れ去られた時は驚いたが蒼媛は旭に対して害意があったわけでもなかったし、むしろその逆だ。純粹な好意は向けられて悪い気はしないし蒼媛の容姿は文字通り神々しいと言つていいほどだ。何もなければ旭は深く考えずにそれを受け入れていたかもしれない……………そう、何もなければだ。

「出来れば結婚は……………その、もう少し考えて欲しいと言うか」

旭には風歌という気になる相手がいる。迷いは残っていたものの蒼媛の乱入がなければそのまま告白してたのは間違いない……………さすがにその相手を忘れて蒼媛の言葉を受け入れてしまふほど旭は浅薄せんぱくではない。

「なぜなのだ?」

蒼媛が首を傾けて旭を見る。

「そ、それはその……………こういうことはまず時間をかけてお互いを知るべきで」

慎重に言葉を選びながら旭は口にする。はっきりと本音を口にするのは簡単だがそれで蒼媛がどう出るのが旭にはわからない。それでもし風歌に害が及ぶようなことになれば旭は悔やんでも悔やみきれないだろう。

「蒼媛は旭の事を知っているぞ、知っているのだぞ?」

「……………そういう意味じゃなくて、例えばお互いの性格とか」

好悪は別として性格には相性というものがあるのだ。友人つきあい程度ならともかく生涯を共にする結婚相手には重要な項目のはずだ。

「蒼媛は旭がどんな性格になつていても受け入れるぞ、受け入れるのだぞ?」  
けれど蒼媛は事もなげにそう答える。

「だからそう言う問題じゃ…………」

「それとも」

不意に冷えこんだような声で蒼媛が旭の言葉を遮る。

「もしかして、旭は蒼媛と結婚するのが嫌なのか?」

「っ!?」

思わず旭は息を呑む。蒼媛がその言葉を口にした瞬間悪寒のようなものが背筋に走った。蒼媛の表情自体は変わっていないのに本能的なものがまずいと全力で告げている。それを肯定するように心なしか晴天だったはずの空も曇っていくように見える……いや曇っていた。目に見えるほどのスピードで空が黒く染まっているのが視界の端に映っている。さらに周囲を取り巻くように強風が吹き荒れ、煽られる木からへし折られた枝が旭の真横を掠めるように飛んで行った。それに驚く間もなく体が浮き上がるような感覚を身に覚える。

「嫌じゃないっ!」

咄嗟に旭は叫んでいた。

「い、嫌なわけがあるはずないよ!」

「そうか!」

嬉しそうに蒼媛が笑みを浮かべると途端に空が暗れ渡っていくのが見えた。同時に周囲を取り巻いていた暴風も即座に立ち消える……そう言えば蒼媛乃大神は天候を司る神様だったと旭は思い出す。その御利益でこの地方一帯は天災に見舞われることなく温暖な気候に恵まれて繁栄してきたのだと。

「では早速夫婦になる儀式とやらをしよう!」

旭の思考を遮るように蒼媛が提案する。

「いや、だからそれはまずお互い話し合っ……ぶっ!」

思わず旭は息を噴いた。目の前で蒼媛が急に衣服をはだけだしたからだ。元々羽織っていただけの状態だったから旭が止める間すらなく蒼媛の裸体が露わになる……半ば予想していたが蒼媛は下着すらつけていなかった。けれどそれに恥じるような様子もなく堂々と旭の前にその裸体をさらけ出す。

「な、ななななななななななななな!」

混乱で言葉がでない。すぐに目を逸らすべきだと理性が訴えるが固定されたように旭の視線は蒼媛の肢体へと釘付けになっていた……特にその胸元の双丘に視線が行ってしまうのは男の性だろうか。すらっとしたその体軀に不釣り合いなほどに大きなそれは重力に引かれてたるむこともなくしつかりとした形を保っている。

「な、何で脱ぐのっ!」

それでも何とか理性を総動員させて旭は顔を背け叫ぶ……何というか蒼媛の側に隠そうとするような羞恥がまるで感じられなかったのも助かった。おかげで顔が赤くなりはしたが興奮してしまいうような雰囲気にはならない。

「性交とやらをする為だぞ、なのだぞ?」

けれど蒼媛は正にストレートな単語を返答した。

「ぶっ!」

再び息を噴く旭。



「せせせせせせ、性交ってっ!」  
「夫婦になるためにする儀式なのだ聞いたぞ?」

ふふん、と得意そうに蒼媛は胸を張る。より前に突き出されたその胸と彼女が口にした単語に嫌がおうにも旭の脳裏にもそのイメージが浮かんでしまう……だが蒼媛の言うそれは順番が逆だ。初夜というものは結婚してから行うものであつて結婚するために行うものではない。

「ではするか、するとしよう」

まるで色気のない声で蒼媛が言い、すつと旭に足を踏み出す。

「ま、待った!」

「む」

叫びながら旭が手を突き出すと蒼媛は止まった。混乱した思考の中で旭は全力で蒼媛の行動を止める理由を探す。

「えっと、そう……蒼媛はちゃんとその方法を理解してるの?」

蒼媛はそうするものと聞いたと言った。つまりはその情報は伝えられたものだ。だとすれば正確に理解していない可能性もあつてそこを突けばうまくごまかせるかもしれない。

「問題ない。蒼媛はちゃんと教えて貰ったからな、貰ったのだぞ?」

しかし無情にも蒼媛はそれを否定する。



「教えて貰ったって……………」  
 誰だそんな余計な事を教えた奴はと旭はそいつを呪のろいたくなった。けれど今はそんなことを考えている余裕はまるでない。

どうすれば、この窮地を逃れられるのだろうか？

旭は早急にその答えを見つけ出さなくてはならない。



「何も問題が起こってないといいですねえ」

蒼媛神社と呼ばれる神社の境内。その裏手にある一軒家の縁側に一人のスーツ姿の女性が腰かけていた。年齢のほどはまだ二十代前半くらいだろうか。容姿自体は悪くなさそうなのがショートカットにまとめた髪に黒塗りの眼鏡をかけていて少し地味な印象を受ける。彼女はのんびりとした表情で手に持った湯呑のお茶をちびちびと口にしていた。

「……………今のところ天候に大きな変化はないようです」

縁側に座る女性の向かいには壮年の男性が一人立っていた。のんびりとした女性とは対照的

に引き締まった表情を浮かべるその顔には深いしわが刻まれている。浅葱色の袴姿をしているところを見るに神社の関係者なのだろう。

「それは重畳ちゆうじやうですね、もしそんなことあったら私上司に怒られちゃいます」

あはは、と女性は苦笑する。

「しかし変化が無ければ居場所を見つけることもできませんが」

「そうなんですよねえ」

男性の言葉に困ったように女性が頷く。

「私は神様相手は専門外ですし、空を飛ばれると地上を歩くしかない身ではどうしようもないです……………まさか十年我慢したのの後十分が待てないとか予想外にもほどがありますね」

だがその僅かな時間をたかが十分と見るか、まだ十分もあると見てしまうかは結局その時の当人の気分次第だ。同じ人間ですら予想できないようなものを、ましてやそれが神様相手では予想できるはずもない。

「それだけ蒼媛様も本気だという事でしよう」

「それはありがたいんですけどね」

ふうと、女性は息を吐くと再び湯呑を口に運ぶ。

「実際のところ脈、あると思います？」

「なければそもそもこのような状況にはなっていないでしょう」

「それはそうなんですけどねえ」

同意するが納得はしていないといった表情を女性は浮かべる。

「積み上げた記憶っていうのは良くも悪くも影響しますから」

「……………」

男性は肯定も否定もせず沈黙する。

「私としてもうまくいってくれた方がいいんですけどね」

「……………うまくいかなかったらどうします？」

男性が尋ねると女性は首を僅かに傾ける。

「事前に説明されてますよね？」

「……………ええ」

「私はその通りに動くだけですよ？ 仕事と私情は分ける主義ですし」

当たり前のように女性は告げた。

「と、あの点つてもしかして蒼媛様じゃないですか？」

何かに気づいたように女性が空を見やる。

「……………神域に向かっていているようですね」

做<sup>な</sup>つて男性も注視し、眩<sup>くら</sup>く。

「では行きましょうか」

湯呑を置いて女性は立ち上がる。

「感動の再会に立ち会うのも無粋ですが、これも仕事ですしね」

しかし女性のその表情はどこか楽しげであるように見えた。



旭は焦っていた。目の前には悪意なく彼の貞操<sup>てんそう</sup>を奪おうとする神様。据<sup>す</sup>え臍<sup>へい</sup>喰<sup>く</sup>わぬは男の恥という言葉が世の中にはあるが、男には譲れない一線もある。だからできれば全力で逃げるなり拒絶するなりしたいのだが……………あの空の暗雲がちらと頭に浮かんでしまう。

蒼媛は間違いなく旭に好意を持っていて、さらには彼もそうであると疑ってないように思える。彼女の感情があ的那天の変化に関<sup>か</sup>わつているとするならば、明確な拒絶は致命的な事態を引き起こすように思えてならないのだ。

「旭」

背筋に冷や汗を垂らす旭へと蒼媛が口を開く。

「旭も脱ぐのだ、脱がねばならぬのだぞ？」

「ぶっ！！」

その発言に再び旭が息を噴く。

「なっ、なんで!？」

「旭も脱がねばできないではないか」

「そうかもしれないけどっ!？」

その通りではあるけども。

「だから脱ぐのだ。脱げぬのなら蒼媛が脱がず、脱がしてしまうのだぞ?」

「ノウツ!」

思わず叫ぶがそれは事態に何の影響も与えない。打開策も咄嗟には思い浮かばず反射的に旭は逃げ出そうとするが……………なぜか体が動かない。まるで四方から無理矢理に体を押さえ付けられているようにびくともしないのだ。

「暴れては、駄目だぞ?」

そんな旭にゆっくりと蒼媛は近づいてその服に手をかける。相変わらず隠そうともしないその裸体が間近に近づいて旭は半ば本能的に意識をこちらにとられてしまう。その隙に蒼媛は躊躇ためらいなく旭の着ていた制服を引きはがす。大して力を込めたようにも見えなかったのに軽々とボタンが飛んで旭の胸元がはだけた。

「次は下を脱がすのだぞ?」

「!？」

ズボンに蒼媛の手が掛けられ、さすがにはっとして旭は抵抗した。普通立場が逆じゃないかと思いつながらも体を抑え付ける謎の力に全力で抵抗する……………しかし無情にも体は僅かに震えるのみで、蒼媛はまるで引き裂くように旭のズボンをその下のパンツごとズリ下ろす。

「わああああああああああああああああああ!」

叫びながら両手で下半身を押し隠す。そうするともう抵抗する為にも両手は使えないわけで後はされるまま……………にはならなかった。

「あ、れ……………?」

なぜか蒼媛は裸にした旭にはそれ以上何もしようとしなかった。むしろ一歩距離を取ってこちらの反応を待っている。何かを期待するようなその視線はまるで餌を待つ餓い犬であるようにも見えた……………いやまあ、胸を張っているから目に毒なのは大きく違うけど。

「さあ性交とやらをするがよい、よいのだぞ?」

そしてそんなことを言った。

「するがよいつて……………」

されるならともかく今の流れで旭の側からするはずがない。しかし蒼媛は何かを確信しているような表情でこちらに期待の目を向けている。

「ええと、蒼媛」

一気に気分が落ち着いて旭は蒼媛の名前を呼ぶ。

「なんだ？」

「その……性交についてどんなふうに教わったの？」

「蒼媛と旭が裸になってするものだと聞いたぞ、聞いたのだぞ？」

「……………その後は？」

「お互いが裸になれば後は旭が獣のようになって勝手にしてくれると聞いたぞ？」

「……………」

旭は無言で手でこめかみを押さえる。そんな旭を蒼媛はきよんとした表情で見た。

「せぬのか？」

首を傾げる。

「そこまでにさせていただきました？」

と、そこで不意にその場に声が響く。それほど大きいわけではないが厳としてよく通る声だった。

「む」

それを聞いて蒼媛はその声のほうへと視線を向けた。

「神主、か」

そこには袴姿の旭にも見覚えのある壮年の男性の姿。彼は硬い表情を浮かべていて、二人の状況に呆れるようでもあり悲嘆しているようにも見えた。

「父、さん……………」

そう、そこに立っていたのは旭の父親だった。神来帷。彼は旭の父親であると同時に蒼媛神社の神主でもある。何で此処にと一瞬思うが、そもそも旭の父は立ち入り禁止のこの神域に唯一立ち入ることを許されていた存在だ……………声を聞いて蒼媛が神主と呟いたことから二人は顔見知りであるのだろう。

「とりあえずズボンを履きなさい」

父親は旭を見て顔を曇めるとまですう言った。

「っ!？」

慌ててズボンを引き上げてはだけた服を羽織り直す……………しかしボタンが飛んでいるせいか上着は完全に元には戻らない。布もかなり伸びてしまっているで制服は仕立て直した方がいいかもしれない。

「あ、動ける」

直した後にふと気づく。いつの間にか体は自由になっていた。よくよく考えればズボンをズリ下げられた時点で体は動いている。服を脱いだ後は旭からするものと蒼媛は思っていたのだからその時点で動きを封じる理由は無くなっていたのだろう。

「さて蒼媛様」

そんな旭から視線を外し、改めて帷は蒼媛へと目を向ける。

「そのような行為は事前に同意をしつかり得るようにと申し上げたはずですが？」  
 尋ねるその声は冷淡で感情が籠らぬように聞こえた。

「拒絶はされていないぞ……………いないのだぞ？」

「同意は得られましたか？」

反論を無視して帷は繰り返す。

「……………得て、おらぬ」

「それでは意味がありません」

帷がはっきり断言すると蒼媛はしゅんとしたように見えた。

「するな、とは言いませんが同意はしっかりと得るようになってください」

念を押すように帷が言う。傍から聞いていた旭は「するな」とは言わないのかと思わないでもないが、拒絶の権利が確約されるなら下手に口を挟む理由もない。

「もー、何で止めちゃうんですか」

しかしそこに口を挟む声一つ。見てみると見知らぬスーツ姿の女性がひょっこりと姿を現してこちらに歩み寄って来ていた。

「あのままなら既成事実が出来る可能性はまだあったのに」

「互いの同意が無ければ逆効果でしょう」

「そんなことないですよ」

女性は首を振る。

「思春期の男の子ですしね、どんな形であれ初体験の相手には情がわきますよ……………それに若いんだから一度覚えちゃえは猿さるみたいにはまっちゃうもんです」

のんびりとした表情と裏腹にそんなことを平然と口にする。

「……………それを目の前で見せられる父親の気持ちにもなって頂きたい」

「あ、それはすっごく嫌ですね」

あっさりと認める。

「まあ、いいです。チャンスはこれからいくらでもありますしね」

その代わり旭にとって不穏な事を口にした。

「えっと……………父さん？」

「なんだ」

声をかけた旭に父親が視線を向ける。

「その人は誰？ と、いうか……………」

蒼媛に視線を向ける。

「分からないことだらけだから一から説明して欲しいんだけど」

「……………そうだな」

至極真つ当な要求であろう息子の言葉に帷は息を吐く。

「何事も無ければ私もそのつもりだった」

ここに初めて見せた、感情の籠った疲れた声。

その原因が誰にあるのかは恐らく言うまでもないだろう。



神、と呼ばれる存在がある。それは各地の神社で祀られ信仰を集め、その恩恵として様々な加護をその土地に与えるとされる。旭の住むこの街でもその信仰は篤く彼の実家である神社にも数多くの参拝客が訪れていた……………しかしそのほとんどの人間が神が実在すると信じてはいないだろう。もつともそれは存在を否定しているのではなく、あくまで彼らが信仰するのは概念上の存在であるということだ。その存在は人にとって心のよりどころではあるが、決してそれは肉を持って実在する存在に対してではない。

けれどどうやら神様は実在してこの世に存在するらしい。その実在は秘匿されているものの信仰の見返りとして確かな加護を与えていて、旭が住まうこの地方も蒼媛の加護の恩恵によつ

て穏やかな気候と豊穡を享受してきたらしいのだ。

「それで」

そこまでの説明を受けてから旭は口を開いた。神の実在はまあいい。既に蒼媛によつて空を運ばれているし目に見えて変わる空模様も見た……………何よりも彼の父親はくだらない冗談を言うような人間ではないのだから。

「神様が実際にいるのはわかったけど……………それがどうしてこんなことになったわけ？」

それを祀る神社の息子なのだから旭自身無関係であるとは思わない……………しかしいきなり結婚だの夫婦だのという話は別だ。突拍子も無さ過ぎる。

「それなんだがな」

やや言いよどむように父親は息子を見た。

「お前がこの場所で蒼媛様に結婚を申し込んだからだ」

「は？」

予想外の返答に思わず旭は帷の目を見る。やはり冗談を言っている目ではない……………けれど旭と蒼媛は初対面のはずだ。どれだけ記憶を思い起こしても結婚を申し込んだ記憶はおろか彼女と会った記憶すら存在しない。

「……………そんな記憶全くないんだけど」

「まあ、十年も昔の事だからな」

無理もないだろうと帷が言う。

「……………」

確かに十年前と言えば旭もまだ幼子と呼んでいい年代だ。しかしそれでも蒼媛のような相手を忘れてしまう事があるだろうか？ ましてや子供心とはいえ結婚を申し込んだ相手だと言いのに。

「事実なのは間違いないですよ？」

そんな旭の内心を読むようにスーツの女性が言う。さつき紹介されたが彼女は御守綾瀬というらしい。非公開の組織ではあるがれっきとした政府の職員であり、主に蒼媛のような神に纏わる事柄に関わる仕事を担当しているようだ。見た目は真面目そうでどこかのんびりとした様子に見えるが、先ほどの発言からするにあまり信用しない方がいい類の相手に思える。

「あ、その顔は疑ってますね……………でも考えてみてください。もしもそれが事実で無かったら蒼媛様があそこまでの自信に溢れているはずはないと思いませんか？」

「……………それは」

確かにその通りではあるのだ。蒼媛は旭に好意を持っているし旭の側もそうであると確信しているように思える……………だからこそ行動に迷いが無い。それは拒絶される可能性などまるで想像もしないからだろう。それを一方的な思い込みだと断じてしまえば簡単だが旭にはそうとも思えない。

「まあ仮に違っていたとしても現実は変わりませんけど」

しかし旭にとって重要であつても彼女にとっては違うようだ。

「いずれにせよあなたと蒼媛さまの結婚は既定路線ですからね」

「なっ!」

選択肢はないと綾瀬は告げる。

「だってあなたの感情は別として、蒼媛様はこの話に大変乗り気ですから」

「そんなの……………」

「ちよつと声が大きいですよ？」

反論を遮って綾瀬が言う。

「蒼媛様の耳に入ったら何が起こるかわかりませんから」

ちらりと視線を送る先には大岩の上に大人しく座る蒼媛の姿。手早く説明を済ますと帷が説得して今は旭から少し離れている……………けれどそれだけで何か不安なのかどこか表情が暗いように見える。

そしてそれに連動するかのように空にも暗雲が少しずつ広がっているようにも見えた。

「蒼媛様にはできるだけショックを与えない方が賢明ですよ？」

「……………」

実例に近いものを見ているせいか旭は否定もできず、救いを求めるように父親を見た。



「事実だ」

けれど無情にも帷はそう答えた。

「蒼媛様は良くも悪くもその感情が周囲に影響を与えてしまう。ここ十年ほどは落ち着いておられたがその感情が荒ふればどんな災害が起こるか予想は知れない」

「……………つまり父さんもこの話には賛成ってこと？」

「父親としては心苦しいが蒼媛様を祀る神主としてはそうなるな」

「……………」

旭にしてみれば父親である彼がこの場での唯一の味方だった。だからそれは旭にとって絶望的な答えといっている。

「念のために確認しておくが……………今お前には好きな相手がいるのか？」

そんな旭の様子に帷が尋ねる。

「……………いる」

「そうか」

正直に答えた旭に帷は息を吐く。

「ならどうするかはお前に任せよう……………ただ前に私が言った覚悟だけは忘れるなよ」

「命を懸けるってやつ？」

「そうだ」

帷は頷く。

「それはもちろん忘れてないけど」

意味深すぎて忘れようも無かった忠告だ。けれどそのかいてもあって旭は風歌に対する自分の思いを確認すると同時にその覚悟も決めていた。自分の命が惜しくないとは言わないが、危険に飛び込んででも得たいものはある。

「一つ、勘違いしてるようだな」

やはり、というように帷が旭を見た。

「危ないのはお前の命ではなく、お前の想いと周囲の人間の命だ」

「……………え？」

「お前の命はむしろ一番安全だろう」

なぜなら蒼媛にとって一番大切なのは旭の存在だろうから。

「それは……………つまり？」

「その意思を貫き通すなら、その想い人を含めた周り全てを巻き込む覚悟をしろという事だ」

「……………」

旭の覚悟は結局のところ被害を被るのが自分自身だけであるからこそ決まったものだ。しかしそれが他者を巻き込むものであるとなれば話は全然違う。

空が曇って暗くなるだけなら被害はない。けれどそれが暴風を伴い雷降り注ぐ状況となると

すれば被害はどれだけ出るのだろうか？ しかもそれが無秩序なものではなく誰か一人を狙うようなものであったとしたら？

「まあ、必ずしもそうなると限ったわけではないが」

洪い顔になった息子に帷はそう声をかける。

「見ての通り蒼媛様は悪性の方というわけではない……………お前の対処の仕方次第では穏便に望む形になることもあるだろう」

確かに蒼媛には邪悪な感じはしない。もしもそうだったらもつと早々に旭は逃げ出そうとしていただろう……………なんというか、純粹なのだ。だからこそ転がり方次第では大変なことになるってしまふのだろうか。

「いずれにせよ選択肢は少ない。まずは受け入れてみることだ」

「……………わかった」

さすがに旭だって一朝一夕に結論の出ることじゃないのは理解している。

「でもそれはそれとしてまだ聞きたいことが……………」

「話は終わったのか、終わったのだな？」

話を続けようとしたところで声と共に抱きつかれる。いつの間移動したのか大岩には蒼媛の姿はなかった。

「待ったのだぞ、待ちくたびれたのだぞ？」

話していたのは十分程度の事なのにその声は本当に寂しそうだ。旭を抱き留める力も心ないか強い気がする……………というか強い。背中に当たる柔らかい感触よりも胸を締め付けられる痛みの方が大きいのだ。

「あの、蒼媛ちよっと苦しいから離して欲しいんだけど？」

「離れぬぞ、離れぬのだぞ？」

「ならせて緩めて……………」

でないし落ちるかもしれない……………しかし蒼媛は緩めるどころかむしろさらに強く抱きついてくる。

「蒼媛様」

そこに帷が口を挟む。

「仲が良いのは喜ばしいですがそろそろ私の家へと戻りましょう……………そろそろ完全に日が暮れますゆえ」

帷の言葉通りすでに夕暮れを通り過ぎて辺りは闇に差し掛かっている。

「旭からは離れぬぞ？」

「どうぞご随意に」

帷が頷く。けれど意識が帷に向いたおかげか、旭を抱きしめていた力も緩まらずいぶんと楽になっていた……………しかし。

「えと、蒼媛はうちに住むの？」

半ば予想していたがそうとしか取れない会話だった。

「当然だろう。それともお前がここに住むのか？」

父親が尋ね返す。

「……………」

蒼媛が旭から離れるという選択肢を選ばない以上、つまりはそういう事らしい。

「ち、ちなみに蒼媛の部屋は？」

「一応用意はしてある」

一応という事は建前上という事で、その理由は今の旭の置かれている状況が全てを物語っているのだろう。

「これからはずっと一緒だ、一緒なのだよ？」

嬉しげな声が続るから聞こえる。旭は何かを叫びたい気持ちで一杯だったが、それを叫んでしまえばどうなるかはすでにさつき体験している……………だから心の中で慟哭した。

「これからよろしくなのだぞ、旭」

その声は純粹で一切の虚飾はなく

「……………はい」

頷く事しか旭にはできないのだった。

こうして彼の神様との生活が始まる。



夜も更けてほとんどの人間が眠りにつくであろう頃に蒼媛はひょっこりと体を起こした。その隣には完全に熟睡している旭の姿があった。何故だか知らないが旭は寢屋を共にすることを拒んだが結局は蒼媛を受け入れて共に眠る事になった。

「にゅふ」

神である蒼媛にとつて十年という時間は短いと言える。その生きてきた年月に比べればそれは隣のような時間だがこの十年に関してはとても長く蒼媛は感じた。それはつまりそれだけこの時間を待ち焦がれたという事で……………このまま寝てしまうには感情は昂ぶり過ぎていた。元々神である蒼媛にとつて睡眠はそれほど必要なものではない。眠る感覚の心地よさと膨大な時間の暇潰しに眠るだけだ。故に眠る事は彼女にとつて娯楽ではあるが我慢できないものではない。

だから、今は眠る旭を前に蒼媛は思うままに行動することが出来る。

「にゅふふ」

眠る旭の顔を蒼媛は覗き込む。疲れているのかその眠りは深く起きる気配は微塵みじんもない。眠るその表情はまだ少年のあどけなさを残していて彼女の大切な思い出を想起させる。それだけで蒼媛は自然に頬が緩んで幸せな気持ちで一杯になった。

「旭」

自分と違って人には眠りが必要なことは知っている。だから起こさぬような小さな声で蒼媛はその名前を呟く。眠る旭に対して蒼媛は自由であり、つまるところ起こしさえしなければ何をしても蒼媛を遮るものはないという事だ……しかし旭が起きていなければ性交とやらを行うことはできない。なぜなら蒼媛はお互いが裸になったら後は身を任せればいとしか教えられていないのだ。

無論 それを模索することは今でもできる……だがそれは駄目だ。神主にも同意は得ないと駄目だと忠告されたし、寝る前にも旭は否定する意思を見せた。蒼媛にはよくわからないがそれをする為にはいくつもの段階があるらしい。まあ別に蒼媛は旭とずっと一緒にいる為の儀式だと聞かされたからしておきたいだけだ。しなくても旭と共に居られるのならそれはそれでいい。問題が無くなれば旭の方からきつとしようと申し出てくれるだろう。

だから今は自分のしたいことをする。起こさない様にゆっくりと旭の胸元へと抱きつく。布の感触………無粋だ。起こす危険はあるが出来る限り丁寧に旭の上着を剥ぎ取る。幸い起こす事はせずにすみ旭の上半身が露わになった。

「むふう」

改めてその胸元へと抱きつく。肌と肌の触れ合う感触。直接伝わってくる熱の温かみが旭という存在がそこに居ることを蒼媛にしつかりと伝えてくれた。その熱を感じることに心を傾けているだけで体全体が温かくなるようにすら感じられる。

その温かみを実感しながら蒼媛は心地よい眠りに落ちていった。

試し読み版はここまで！

続きはGA文庫「かみこ」〜くついたらとれません〜でお楽しみ下さい！  
11月15日頃発売！